

申命記10章は神が契約を結び直す場面です。罪深いイスラエルの民に対し、神の愛とイスラエルの果たすべき責任をモーセが確認します。

神は、「前のような石の板を切って作り、山のわたしのところに登れ。…その板の上に、わたしは、あなたが砕いた、あの最初の板にあったことばを書きしるそう」と言われます。

「前のような石の板」とはシナイ山でモーセがもらった十戒の二枚の板のことですが、人々が偶像崇拝に耽っているのを見て激怒し、モーセはそれを粉々に打ち砕いてしまいます。その二枚の板は、イスラエルがこれから祝福された人生を生きるための最も重要な指針でしたが、それがすっかり失われてしまったのです。

ところが、神は、モーセのとりなす言葉を聞き入れ、イスラエルを根絶やしにすることを思いとどまり、「前のような石の板」を作るようモーセに命じます。そして、最初と同じことばをそこに書き記されます。人はどんなに不忠実でも、神は変わることなく忠実です。イスラエルにとっては、自分たちの不忠実さの故に、生きる指針を失って荒野で滅びて然るべきところですが、神はそんな彼らを見捨てることなく、再び「十戒」を彼らにお与えになるのです。

四十日四十夜再びシナイ山にとどまった後、主はモーセに命じます。「民の先頭に立って進め。そうすれば、わたしが彼らに与えると彼らの先祖たちに誓った地に彼らは入り、その地を占領することができよう。」(11) こうして、絶滅の危機を免れて、イスラエルはあらためてカナン相続を約束されます。とは言え、一度致命的な失敗をしてしまった彼らに、「民の先頭に立つ」モーセが教訓を述べます。

これは当時の失敗を踏まえた第一世代への教訓であると同時に、「イスラエルよ。今、あなたの神、主が、あなたに求めておられることは何か。」とあるように、「荒野の四十年」を生き残った第二世代への教訓でもありました。「求めておられる」というヘブル語は「問う、求める、期待する」という意味を持ちます。「荒野の四十年」を通して、結局、神が御自身の民に「問い、期待し、求めておられたこと」は何か、と言うのです。それは「ただ、あなたの神、主を恐れ、主のすべての道に歩み、主を愛し、心を尽くし、精神を尽くしてあなたの神、主に仕え、あなたのしあわせのために、私が、今日、あなたに命じる主の命令とおきてとを守ること」です(12-13)。

ここでは四つのことが言われます。

まず一つめは、「あなたの神、主を恐れて、主のすべての道に歩む」ことです。荒野で死んだ旧世代は、神を恐れず、自分勝手に生きました。彼らは「主の道」ならぬ「自分の道」を行きます。それで、彼らはひとり残らず荒野で死に絶えます。それで、そうならないよう、イスラエルは四十年かけて「あなたの神、主を恐れて、主のすべての道に歩む」ことを神から徹底して教育されました。

神がご自分の民に求めておられる二つめのことは、「主を愛する」ことです。「愛する」と訳されるヘブル語は最も一般的に「愛」を表現する言葉で、人にも神にも使われます。70人訳ギリシヤ語聖書では、神の一方的な選びの愛を表現する「アガペーの愛」として訳されていることなどから、神が一方的に愛する無条件の「選びの愛」を意味するという解釈があります。そのように人々が「主を愛する」ことを神が求めておられるというのです。事実、ご自身を愛するよう神が求めておられる背景には、誰より神ご自身がまず人々を愛しておられるという前提があります。「見よ。天ともろもろの天の天、地とそこにあるすべてのものは、あなたの神、主のものである。」(14)とモーセが言うように、神は「もろもろの天の天」すなわち「この世」のみならず「最も高い天」を所有する、まさに最高神です。「主の主」、「神の神」は如何なるものにも支配されません。神は完全に自由です。絶対主権者です。「偉大で、力があり(戦士、専制君主、英雄の意)、恐るべき」無敵の王者です。「偏って愛する」とか、「賄

略を取る」必要が無いのです(17)。この天地宇宙で最も偉大な神が「ただ、あなたの先祖たちを恋い慕って（執着する、愛着する）、彼らを（最高の愛をもって）愛され」ました。そして、その結果として、「彼らの後の子孫、あなたがたを、すべての国々の民のうちから選ばれた」と言うのです(15)。この最も偉大な神が、罪に滅びゆくこの世からアブラハムとその子孫を特別に選び、ご自分の民となさいました。無条件で、一方的に、絶対主権をもって彼らを選んで、ご自身の民となさいました。だからその愛に応えて、彼らもまた神を愛するよう、求めておられるのです。「わたしはお前を愛しているが、お前は私を愛するか。」この四十年間、彼らは問われ続けてきたのでした。

神がご自分の民に求めておられる三つめは、「心を尽くし、精神を尽くしてあなたの神、主に仕える」ことです。これは先の「主を愛する」ことの具体的な説明です。「主を愛する」とは具体的にはどうすればよいのでしょうか。一つは、「心を尽くし、精神を尽くしてあなたの神、主に仕える」ことです。二つめは、「あなたのしあわせのために、私が、今日、あなたに命じる主の命令とおきてとを守る」ことです。「仕える」という言葉には「働く、耕す、（奴隷として主人に）仕える」という意味があります。神を愛するとは机上の空論ではありません。頭だけ、口先だけでなく、現実に神のために働き、奉仕します。それも、見せかけの奉仕ではなく、心からの奉仕、魂の奉仕、いのちを賭け、人生をささげた全身全霊の奉仕です。そのひとり子を与えるほど愛された神の愛に応えて、私たちがまた全身全霊で神を愛することを神は求めておられます。

最後に、神がご自分の民に求めておられることの四つめは、「あなたのしあわせのために、私が、今日、あなたに命じる主の命令とおきてとを守る」ことです。これもまた「神を愛する」ことの具体的なあり方です。「あなたのしあわせのために」は「あなたにとって最高にすばらしく良いことのために」と訳せます。神の「命令とおきて（法）」は、神にとって最もすばらしく良いものなのです。神は「最高にすばらしい人生」を生きるために律法をくださいました。私たちだけが幸せになるだけではありません。私たちを通してこの世界に神の恵みが溢れ流れると約束されました。「地上のすべての民族はあなたによって祝福される」と言うのです。律法は、これを行えば神が喜び、そうでなければ神は悲しむという、神のみこころ、人格そのものです。そして、それは同時に、天国の法であり、最も幸いな天国のような人生の設計図です。神は、ご自分の民が最高にすばらしい人生を生きるようにと「律法」をお与えになりました。それを守って生きることを求めておられるのです。

そして「神を愛する」ことの次に、唐突にこう命じられます。「あなたがたは在留異国人を愛しなさい。あなたがたもエジプトの国で在留異国人であったからである。」(19)「神を愛し」とあれば当然「人を愛せよ」となるところですが、あたかもその代表であるかのように「在留異国人を愛しなさい」と命じられます。「在留異国人」と言えば「みなしご」「やもめ」と並んで身寄りのない弱者です(18)。神しか頼るものがありません。「自分の身内や親しい友人を愛せよ」ではなく、全く関係のない「在留異国人」を愛することは、考えてみれば最も難しいことです。自分が神に愛されていることを本当に知り、感謝している者でなければ、到底できるものではありません。すなわち、自分も元々はエジプトで「在留異国人」の奴隷だったのに神はこんな者を愛して救ってくださった、この神の恵みに感謝して初めて、かつての自分と同じ境遇にある「在留異国人」を愛することができます。だからこそ、モーセはわざわざ「在留異国人」を特筆して、彼らを「愛しなさい」と命じるのです。

功労牧師の石川弘司先生が召されて寂しく思います。赤羽聖書教会を開拓した先生ご夫妻の功績は数え切れないほどあると思いますが、「在留異国人を愛しなさい」を文字通り実践なさったことは、先生ご夫妻の特筆すべき歴史的な功績かと思えます。「韓流」のずっと以前から先生は何度も韓国に足を運び、韓国人宣教師と協力し、留学生をよく世話して、日韓の交流をなさいました。私を後任に招聘してくださったのもその関係です。ある時は焼け出された留学生家族を教会に住まわせて丸抱えで助けたと聞いています。その後、その家族は帰国して牧師となっ

て今は韓国で立派に牧会しておられるようです。異国で様々な不便や差別で悩み苦しむ「在留異国人」の友となり、父となって、彼らを助け、励まし、共に生きてこられた石川先生ご夫妻は、この地に神の栄光をあらわされました。「韓流」以前のことでですから、尚更そう思います。

神の愛に応じて神と人を愛する、それが「今、あなたの神、主が、あなたに求めておられること」です。どんなに暗い時代にあっても神を見失ってはなりません。神は最も偉大な永遠の神です。すべては神のものです。私たちは神に絶対的に愛されています。この神の愛に応じて、「ただ」神と人を愛し、神と人に仕えて生きる、時代を超えて、これが「今、あなたの神、主が、あなたに求めておられること」です。神の愛に応じて、神と人を愛して生きましょう。